

災害時のボランティアに関する調査研究

- 新潟・福井豪雨および台風23号の事例 -

鈴木 勇*

A Study of Volunteers Active in Disaster

- A Case of Niigata-Fukui Flood and Typhoon No.23 -

Isamu SUZUKI

Project Team for "Research on Social Systems Resilient against Natural Disasters",

National Research Institute for Earth Science and Disaster Prevention, Japan

suzuki@bosai.go.jp

Abstract

Disaster volunteers were examined in present study. Questionnaire survey was conducted in Sanjo city (Niigata prefecture), Fukui city (Fukui prefecture) and Toyooka city (Hyogo prefecture) where flood disaster happened in 2004. Those questions were discussed, (1) who are volunteers? (2) what kind of volunteer activities were made in the stricken area? (3) how were volunteers estimated by people living in the stricken area? (4) What was the situation of community activities in the area?

Key words : Volunteers active in disaster, Niigata Flood, Fukui Flood, Typhoon No.23, Questionnaire survey

1. はじめに

1.1 新潟・福井豪雨災害および台風23号災害の概要

2004年の夏から秋にかけて日本全国で水害が重なった。本研究では、2004年7月の新潟・福島豪雨災害、同じく7月の福井豪雨災害、そして、10月の台風23号による災害に焦点を当てる。

7月12日から13日にかけて、日本海からのびる活発な梅雨前線は、新潟県中越地方や福島県会津地方に記録的な雨を降らせた（栃尾雨量観測所では7月13日に421mm/日を記録）。この豪雨により新潟県三条市、見附市、中之島町を流れる五十嵐川や刈谷田川の堤防が決壊し、死者16名、全半壊家屋5,400棟におよぶ被害が発生した（新潟・福島豪雨災害）。

また、7月17日から18日にかけて、梅雨前線の南下に伴い、福井県美山町や福井市で記録的な雨となった（美山雨量観測所では7月18日に88mm/時を記録）。この豪雨により福井市や美山町を流れる足羽川、清滝川の堤防が決壊し、死者4名、行方不明者1名、床上床下浸

水家屋13,000棟を超える被害をもたらした（福井豪雨災害）。

さらに、10月13日にマリアナ諸島近海で発生した大型で強い勢力を持つ台風23号は、19日に沖縄本島に上陸すると、四国、近畿、東海地方に被害をもたらし、21日に温帯低気圧となった。この台風により、兵庫県豊岡市や出石町を流れる円山川や出石川、京都府舞鶴市を流れる由良川が氾濫した。台風23号は全国で100名近くの死者行方不明者を出し、兵庫県だけでも死者26名を数え、床上床下浸水家屋は10,000棟を超えた。

1.2 災害時のボランティア

ボランティア元年と言われた阪神・淡路大震災から10年が経過し、災害時にボランティアが活動することは特別のことではなくなった。上記の水害においても被災地に災害ボランティアセンターが設置され、ボランティアが救援活動に従事した。その数は、新潟豪雨災害時の新潟県で約45,000人、福井豪雨災害時の福井県で約58,000人、台風23号災害時の兵庫県で約22,000人

*独立行政法人 防災科学技術研究所 「災害に強い社会システムに関する実証的研究」プロジェクトチーム
(現：大阪大学 人間科学研究科)

と発表されている(消防庁, 茨城県社会福祉協議会, 2004)。本研究では, 2004年の水害被災地において, ボランティアに関するアンケート調査を実施した。

そもそもボランティアとは誰のことを指すのであろうか。行政等の発表するボランティア数は多くの場合, 災害ボランティアセンターでの受付数である。したがって, そこでは災害ボランティアセンターを通じて活動した人がボランティアとしてカウントされる。しかし, ボランティアに関する明確な定義があるわけではなく, 人々が誰をボランティアと呼ぶかは個々人によって違ってくると思われる。例えば, 自衛隊や行政の活動はボランティアと呼べるだろうか。あるいは, 復旧作業を手伝う家族や友人はボランティアと呼べるだろうか。ボランティアについて語る際, 人々が誰をボランティアと捉えているかについて明らかにすることは重要である。

また, 被災地内のどの程度の人々がボランティア活動を行っているのだろうか。自ら被災した人々, あるいは自らは被災してはいるが近くに被災者が存在する人々がどのようなボランティア活動を行ったのか, あるいは, 行わなかったのか。阪神・淡路大震災の例をひくまでもなく, 災害時に地域コミュニティにおける助け合いが重要であることは言うまでもない。したがって, 被災地内の人々がどのようなボランティア活動を行ったのかを検討することの意義は大きい。

さて, ボランティアは美談と共に語られることが多い。ボランティアは辞書で, 「自ら進んで社会事業などに無償で参加する人」と説明されている(新村, 1998)。つまり, ボランティアとは自発的に, 金銭的な見返りを求めることなく被災地で救援活動を行う人々であるので, ボランティアが美談と共に語られることは理解できる。実際, 新潟や福井の被災地の方々からも, ボランティアに対する感謝の声を多く聞いた。しかし, ボランティアが被災地で問題を起こす報告も少なくない。例えば, 夜, ボランティアに用意された宿泊施設の近くで酒を飲んで騒いだり, 被災者の家に入って作業をする際に家主とトラブルを起こすこともしばしば伝えられている。そこで, 2004年の豪雨災害の被災地の人々は, ボランティアに対してどのような印象を持ち, どのように評価したのかを検討してみる必要がある。

さらに, ボランティア活動と地域活動との関係は重要である。災害時に近隣住民同士の助け合いが重要であることは, これまでに何度も指摘されている。また, 新潟豪雨災害で決壊した五十嵐川では消防団が土のう積みを行い, 被害の拡大を防いだ。さらに, 被災地の多くの災害ボランティアセンターでは, 市町村の社会福祉協議会が中心的な役割を担っている。したがって, 平常時の近所づきあいや消防団・水防団へのかかわり, 社会福祉協議会への関わりが災害時の救援活動に影響することが考えられる。

以上, 本稿のボランティアに関する課題を4つにまとめる。誰のことをボランティアと呼んでいるのか。被災地内でどの程度の人々がどのようなボランティア活

動を行ったのか。美談がある一方で, 問題点も指摘されているボランティアを, 被災地の人々は, どのように評価したのか。被災地での平常時の地域活動の状況はどうであったのか。

2. 方法

2.1 調査概要

新潟豪雨災害, 福井豪雨災害および台風23号災害による浸水被害のあった, 新潟県三条市, 福井県福井市, 兵庫県豊岡市を調査対象地域とした。各市において浸水区域より500世帯, 非浸水区域より500世帯の計1,000世帯, 3市合わせて合計3,000世帯を住民基本台帳よりランダムサンプリングした。

2005年2月10日に福井市, 豊岡市の調査対象世帯に対して, 2月14日に三条市の調査対象世帯に対して質問紙等を送付し, その後, 郵送により回収した。2月21日にアンケート調査に協力いただくことへの感謝状と共に催促状を送付し, 2005年3月7日を回収期日とした。1,259世帯より回答を得, 回収率は42%であった。

2.2 調査項目

どのような人々がボランティアと呼ばれるのか, 被災地の人々はどのようなボランティア活動を行ったのか, ボランティアに対してどのような評価をしているのか, 平常時には地域活動にどのように関わっているのか, アンケート調査では, こうした点に関して尋ねた。具体的な質問項目は次の通りである。

2.2.1 誰がボランティアなのか

「あなたにとって, 誰に支援してもらうことが「ボランティア」だと思いますか」という設問に対し, 誰にあたる部分を以下の6項目設定した。「1.面識の無い人」「2.親戚」「3.顔なじみの近隣住民」「4.行政関係者」「5.友人・知人」「6.あまりふだんしゃべる機会がない近隣住民」。それぞれについて, 「全くボランティアだと思わない」から「非常にボランティアだと思う」までの5つの選択肢から1つの回答を求めた。

2.2.2 被災地の人々が行ったボランティア活動

「あなた自身は, 昨年の水害でボランティア活動をおこないましたか」という設問に対し, 「1.泥の除去」「2.災害ごみの除去」「3.避難生活支援」「4.高齢者への食事の世話」「5.その他(自由記述)」「6.何もしていない」の6つの選択肢から複数回答を求めた。

2.2.3 ボランティアに対する評価

「1.ボランティアによる支援は, 被災地の復興に貢献した」「2.ボランティアに感謝している」「3.地区の被害度に応じて, ボランティアの人数は適切に割り当てられていたと思う」「4.ボランティアの被災者に対する態度に好感を持てた」「5.ボランティアの活動は, 効率的に進められていた」の5つの設問に対して, 「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5つの選択肢から1つの回答を求めた。

2.2.4 平常時の地域活動

「1.あなた自身を含め, ご近所づきあいは活発である」

「2.消防団（水防団）が、どのような活動を実施しているかを知っている」「3.消防団（水防団）の活動に参加するように心がけている」「4.社会福祉協議会が、どのような活動を実施しているかを知っている」「5.社会福祉協議会の活動に参加するように心がけている」「6.地域における自治会・町内会が、どのような活動を実施しているかについて知っている」「7.地域における自治会や町内会の活動に参加するように心がけている」の7つの設問に対して、「全くそう思わない」から「非常にそう思う」までの5つの選択肢から1つの回答を求めた。

3. 結果と考察

3.1 誰がボランティアなのか（図1）

「面識の無い人」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で76%，三条市で72%，福井市で76%，豊岡市で77%と高い値であった（図1.1）。

「親戚」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で42%，三条市で46%，福井市で35%，豊岡市で46%であった（図1.2）。

「顔なじみの近隣住民」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で61%，三条市で56%，福井市で63%，豊岡市で66%であった（図1.3）。

「行政関係者」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で33%，三条市で28%，福井市で34%，豊岡市で35%であった（図1.4）。

「友人・知人」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で68%，三条市で66%，福井市で68%，豊岡市で68%であった（図1.5）。

「あまりふだんしゃべる機会がない近隣住民」からの支援を「非常にボランティアだと思う」あるいは「ややボランティアだと思う」人の割合は、全体で64%，三条市で55%，福井市で71%，豊岡市で65%であった（図1.6）。

誰からの支援をボランティアだと思うのかについては、割合が高い順に「面識の無い人」「友人・知人」「あまりふだんしゃべる機会がない近隣住民」「顔なじみの近隣住民」「親戚」「行政関係者」となった。

一般に、ボランティアは「自発性」「社会性」「無償性」によって定義される（eg., 内海ら, 1999）。つまり、強制されず自分の意思によって、社会的に意義ある活動を、無償で行うことがボランティアとされる。この定義から上の結果をみると、活動自体は全て社会的意義を持つものなので「社会性」では差がないはずである。「無償性」に関しては、仕事の一貫ととらえられる「行政関係者」以外では差がないはずである。では、「面識の無い人」「友人・知人」「あまりふだんしゃべる機会がない近隣住民」「顔なじみの近隣住民」「親戚」の差は何に起因する

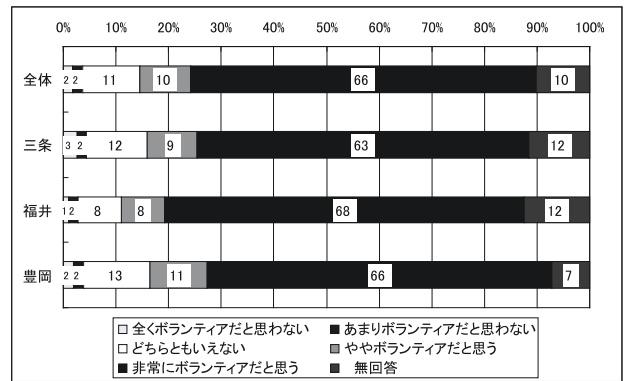


図 1.1 誰がボランティアなのか（面識の無い人）.

Fig. 1.1 Who are volunteers? (strangers).

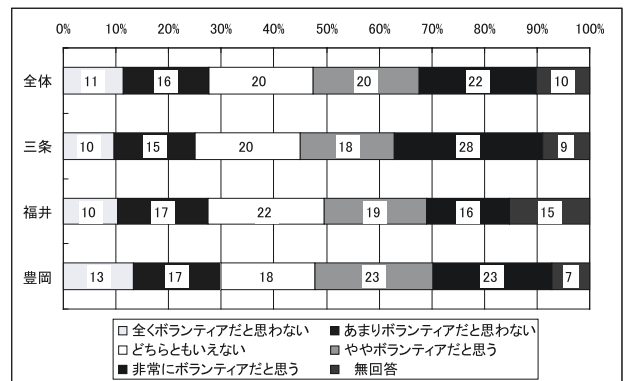


図 1.2 誰がボランティアなのか（親戚）.

Fig. 1.2 Who are volunteers? (relatives).

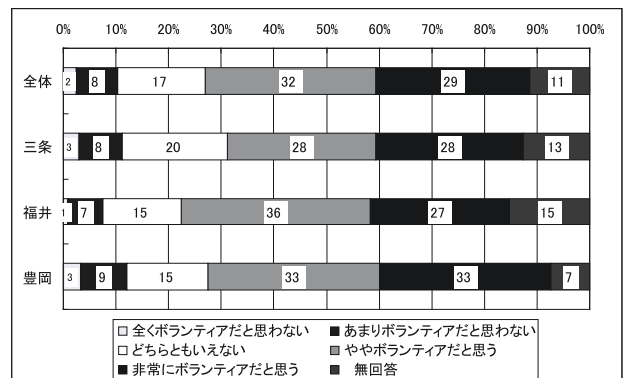


図 1.3 誰がボランティアなのか（顔なじみの近隣住民）.

Fig. 1.3 Who are volunteers? (familiar neighborhoods).

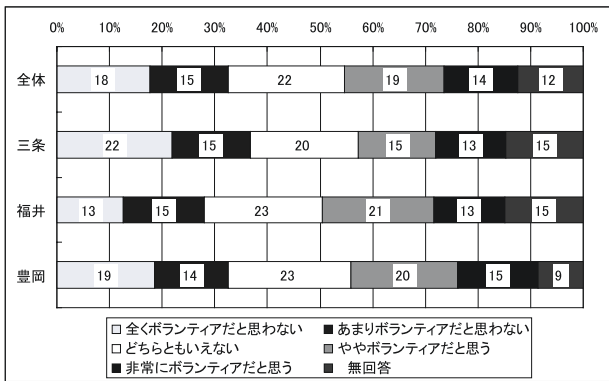


図 1.4 誰がボランティアなのか (行政関係者).
Fig. 1.4 Who are volunteers? (administrative officials).

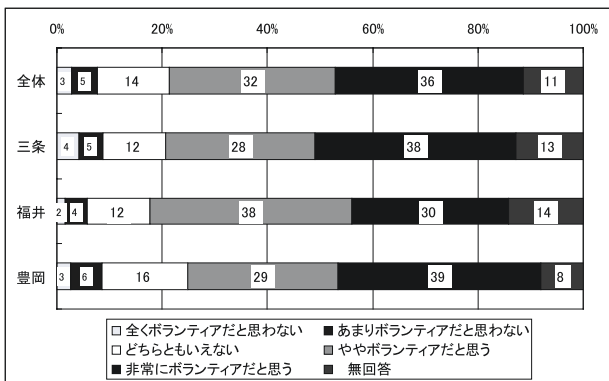


図 1.5 誰がボランティアなのか (友人・知人).
Fig. 1.5 Who are volunteers? (friends).

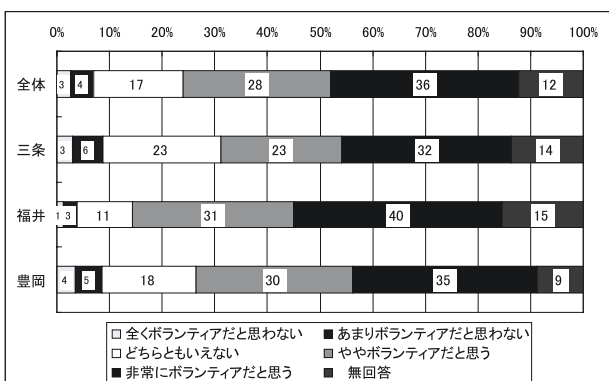


図 1.6 誰がボランティアなのか (あまりふだんしゃべる機会がない近隣住民).
Fig. 1.6 Who are volunteers? (unfamiliar neighborhoods).

のであろうか。これらの差は自発性のとらえ方の違いによるものと思われる。つまり、面識があるよりもない方が、親戚であるよりもない方が、近隣に住んでいるよりも住んでいない方が、その活動主体の自発性をより強く感じるため、結果に差が出たと考えられる。

3.2 被災地域の人々が行ったボランティア活動 (図 2)

被災地域の人々が行ったボランティア活動は、三条市、福井市、豊岡市の三市とも、「泥の除去」と「災害ごみの除去」がそれぞれ3割程度のほぼ同じ割合で最も多く行われていた。次に「避難生活支援」、「高齢者への食事」が続く。これは、水害被災地域において、泥や災害ごみの処理が最も大きな課題となることを示している。

また、「何もしていない」の割合が3~4割とあるが、ここには、「自宅で精一杯 (三条, 男性 60代)」「我が身の復旧に手一杯 (豊岡, 男性 40代)」「ボランティアどころではなかった (三条, 男性 50代)」「自分自身の家の被害がすごかったため活動はできなかった (三条, 男性 60代)」とあるように、自らが被災し、その復旧に手一杯であった人々が含まれていることを考慮する必要がある。このことは、被災地内では、被災の程度によって、支援する側と支援される側が容易に反転する可能性があることを示している。

その他の活動として次のものがあつた。「金銭での見舞い (三条, 男性 60代)」「見舞金 (福井, 男性 70代)」「食べ物への援助 (福井, 女性 60代)」などの見舞金や救援物資。「ボランティアの送迎 (三条, 男性 50代)」「我家に20人のボランティアを3泊4日で受け入れた (豊岡, 女性 40代)」「ボランティアの宿泊所として使っていただいた (豊岡, 女性 50代)」などのボランティアへの支援活動。「消防団活動 (豊岡, 男性 30代)」「地域の防災組織の活動 (豊岡, 男性 30未満)」などの地域の防災活動。そして、「交通整理 (三条, 男性 50代)」「大工仕事 (福井, 男性 70代)」「被災住宅の被災度判定 (福井, 男性 50代)」「区内の独居老人の見回り (豊岡, 男性 60代)」など様々な支援活動である。このことから、これまで経験したことがないような地域コミュニティ外からの支援活動も、これまでも行われてきた地域

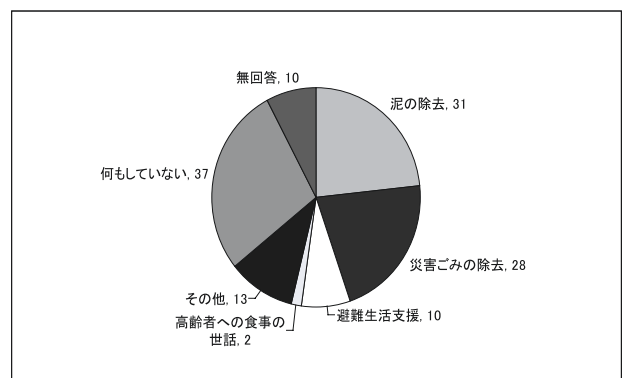


図 2.1 被災地でのボランティア活動 (全体)

Fig. 2.1 Volunteer activities in the stricken area (all).

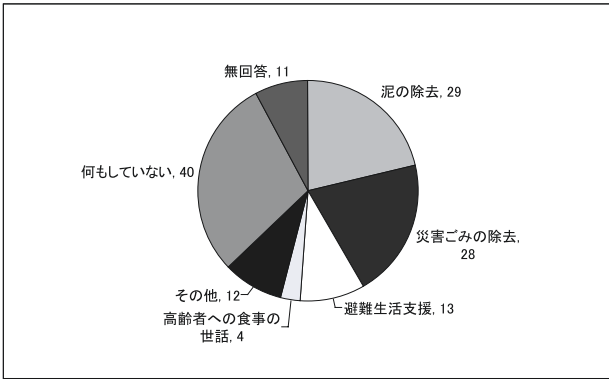


図 2.2 被災地でのボランティア活動 (三条市)
Fig. 2.2 Volunteer activities in the stricken area (Sanjo City).

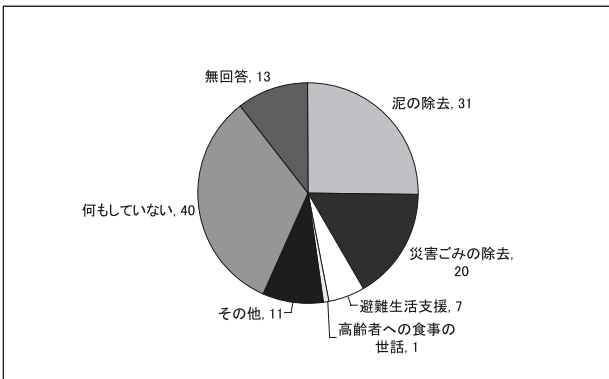


図 2.3 被災地でのボランティア活動 (福井市)
Fig. 2.3 Volunteer activities in the stricken area (Fukui City).

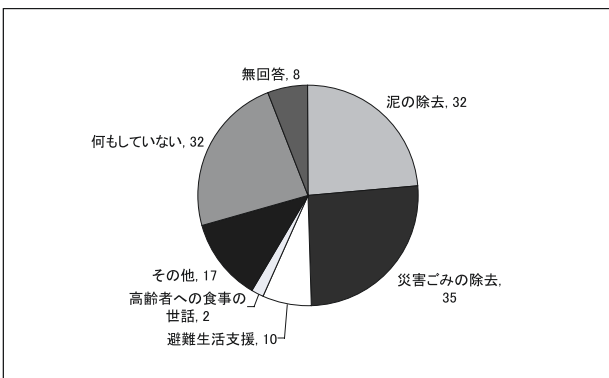


図 2.4 被災地でのボランティア活動 (豊岡市)
Fig. 2.4 Volunteer activities in the stricken area (Toyooka City).

コミュニティ内での共助活動も、共に、ボランティアという言葉で指し示されていることがわかる。

3.3 ボランティアに対する評価 (図 3)

ボランティアに対する意見を尋ねた質問項目では、「ボランティアによる支援は、被災地の復興に貢献した」に対して、「非常にそう思う」割合は、全体で 72 %、三条市で 70 %、福井市で 72 %、豊岡市で 73 % に達し、高い値を得た (図 3.1)。また、「ボランティアに感謝している」に対しても、「非常にそう思う」割合は、全体で 74 %、三条市で 73 %、福井市で 71 %、豊岡市で 76 % と高い値を示した (図 3.2)。

「地区の被害度に応じて、ボランティアの人数は適切に割り当てられていたと思う」に対しては、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合計した割合が全体で 40 %、三条市 39 %、福井市 42 %、豊岡市 38 % である一方、「どちらともいえない」の割合も各市 3 割から 4 割に達している (図 3.3)。これは、ボランティアの割り当てに関して若干の課題があると考えられる。

「ボランティアの被災者に対する態度に好感を持た」に対して、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合計した割合は全体で 69 %、三条市 71 %、福井市 67 %、豊岡市 68 % であった (図 3.4)。また、「ボランティアの活動は、効率的にすすめられていた」に対して、「非常にそう思う」「ややそう思う」を合計した割合は全体で 55 %、三条市 54 %、福井市 57 %、豊岡市 54 % であった (図 3.5)。

これらの結果から、被災地域の人々がボランティアを好意的に評価していることがうかがえる。特に、ボランティアへの感謝の値が高いと共に、ボランティアが被災地の復興に貢献したと考える人々の値も高いことは、ボランティアが単なる自己満足ではなく、被災地の役に立つ存在として受け入れられていると考えることができる。ただ、ボランティアの人数の割り当てや活動の効率性については、さらに改善の余地が認められた。

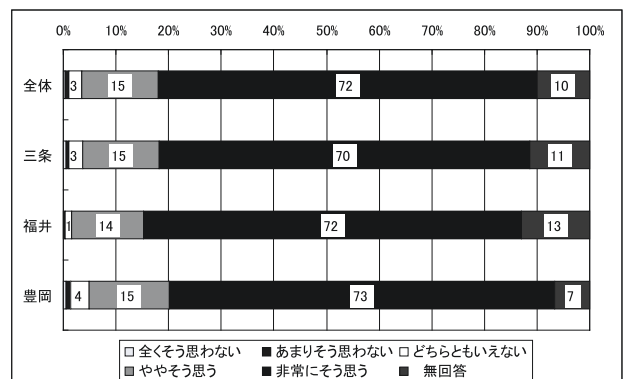


図 3.1 ボランティアの復興への貢献
Fig. 3.1 Volunteer's contribution to restoration.

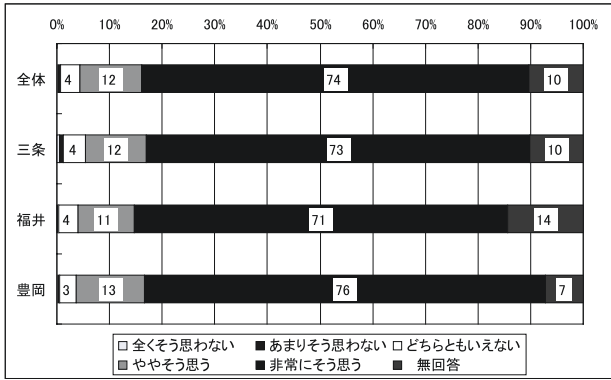


図 3.2 ボランティアへの感謝
Fig. 3.2 Gratitude to volunteers.

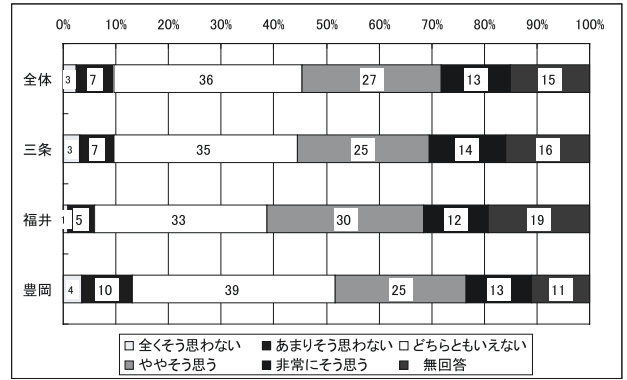


図 3.3 ボランティアの適切な割り当て
Fig. 3.3 Arrangement of volunteers.

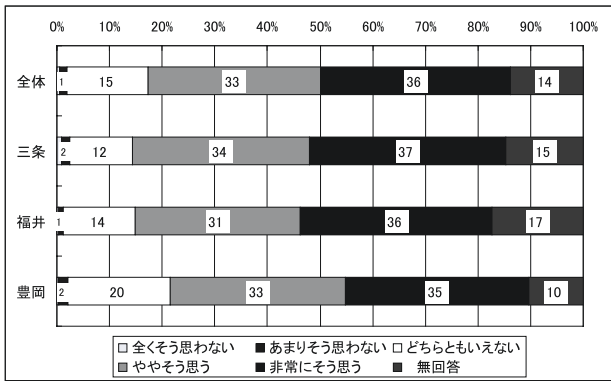


図 3.4 ボランティアの好感度
Fig. 3.4 Good impression on volunteers.

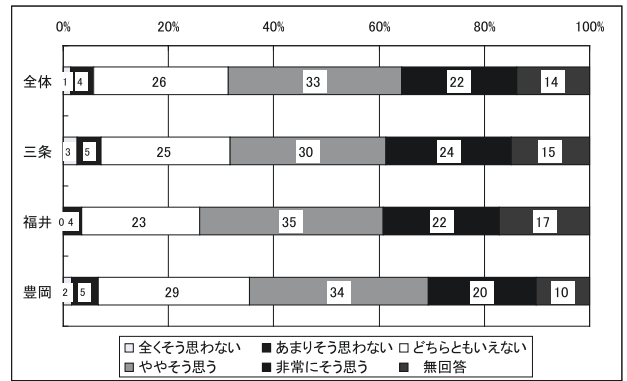


図 3.5 ボランティアの効率性
Fig. 3.5 Efficiency of volunteer activities.

3.4 平常時の地域活動 (図 4)

自分が住む地域における活動を尋ねる設問において、「あなた自身を含め、ご近所づきあいは活発である」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 52 %、三条市 46 %、福井市 46 %、豊岡市 61 %であった (図 4.1)。

「消防団 (水防団) が、どのような活動を実施しているかを知っている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 40 %、三条市 31 %、福井市 28 %、豊岡市 56 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 32 %、三条市 39 %、福井市 40 %、豊岡市 22 %であった (図 4.2)。

「消防団 (水防団) の活動に参加するように心がけている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 21 %、三条市 11 %、福井市 14 %、豊岡市 34 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 41 %、三条市 49 %、福井市 46 %、豊岡市 30 %であった (図 4.3)。

「社会福祉協議会が、どのような活動を実施しているかを知っている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 20 %、三条市 16 %、福井市 21 %、豊岡市 24 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 48 %、三条市 52 %、福井市 49 %、豊岡市 45 %であった (図 4.4)。

「社会福祉協議会の活動に参加するように心がけている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 15 %、三条市 11 %、福井市 16 %、豊岡市 15 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 46 %、三条市 47 %、福井市 47 %、豊岡市 44 %であった (図 4.5)。

「地域における自治会・町内会が、どのような活動を実施しているかについて知っている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 50 %、三条市 44 %、福井市 49 %、豊岡市 56 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 23 %、三条市 28 %、福井

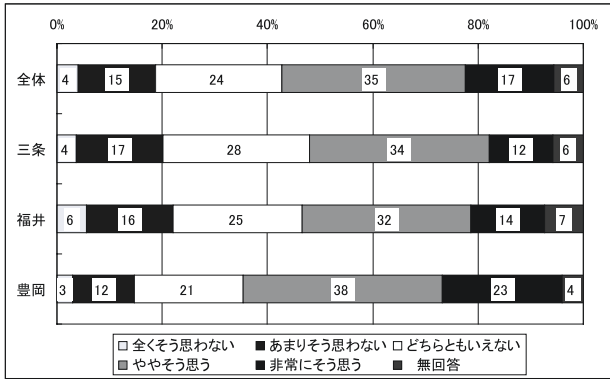


図 4.1 近所づきあいの活発さ
Fig. 4.1 Communication with neighbors.

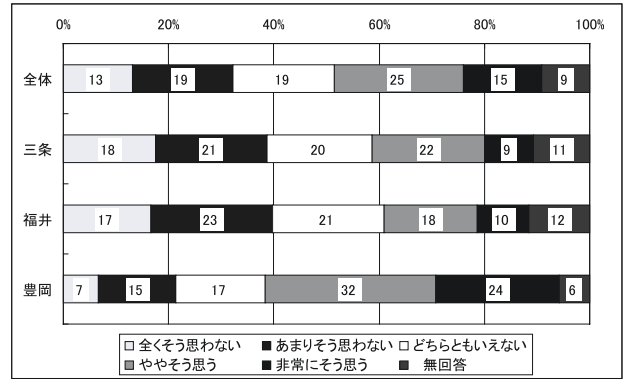


図 4.2 消防団活動の認知度
Fig. 4.2 Acknowledgement of volunteer fireman.

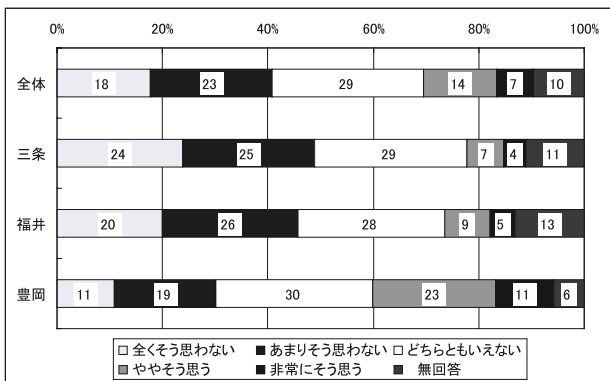


図 4.3 消防団活動への参加意欲
Fig. 4.3 Participation in activities of volunteer fireman.

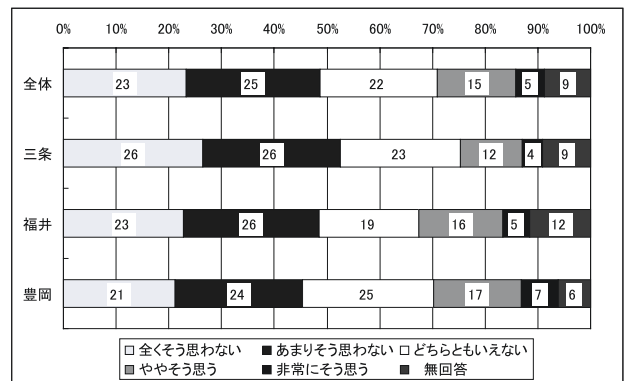


図 4.4 社会福祉協議会活動の認知度
Fig. 4.4 Acknowledgement of council of social welfare.

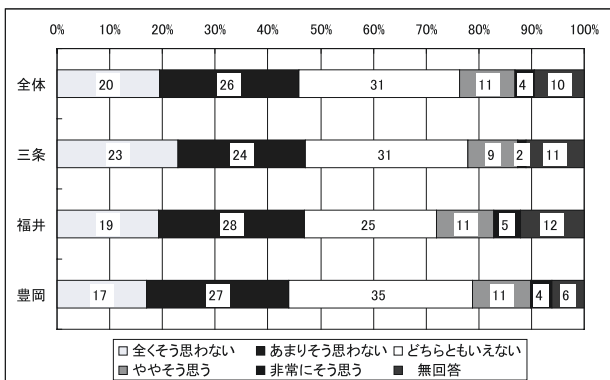


図 4.5 社会福祉協議会活動への参加意欲
Fig. 4.5 Participation in activities of council of social welfare.

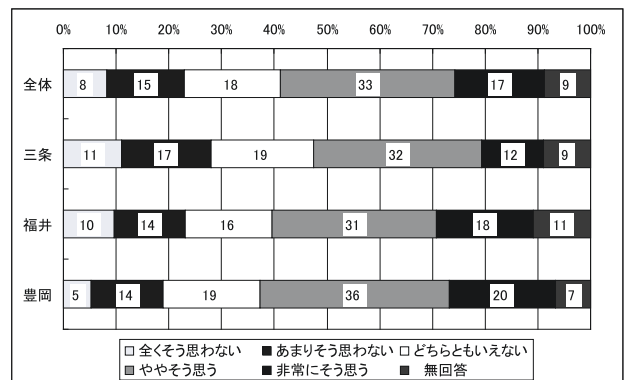


図 4.6 自治会・町内会活動の認知度
Fig. 4.6 Acknowledgement of neighborhood association.

市 24 %，豊岡市 19 %であった（図 4.6）。

「地域における自治会や町内会の活動に参加するように心がけている」に対して、「非常にそう思う」と「ややそう思う」を合計した割合は全体で 57 %，三条市 50 %，福井市 60 %，豊岡市 60 %であった。また、「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を合計した割合は全体で 18 %，三条市 22 %，福井市 16 %，豊岡市

15 %であった（図 4.7）。

これらの結果から、まず、近所づきあいは比較的活発であることがわかる。自治会や町内会の活動についてよく知っている人の割合も半数に達し、約 6 割の人がその活動に参加したいと考えている。しかし、消防団（水防団）や社会福祉協議会の活動に関しては認知度も参加意欲もそれほど高いとはいえない。しかし、そんな中で豊

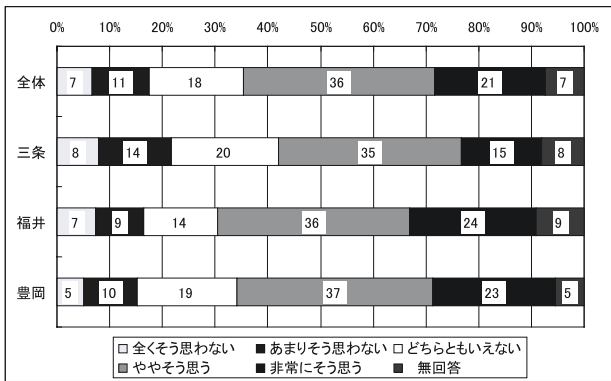


図 4.7 自治会・町内会活動への参加意欲
Fig. 4.7 Participation of activities of neighborhood association.

岡市の消防団（水防団）の認知度と参加意欲は他の2市と比較して高くなっている。こうした地域特性が災害時の救援活動にどのように影響しているのかを調べることは今後の課題である。

4. まとめ

本研究では、2004年に水害被害を受けた新潟県三条市、福井市、兵庫県豊岡市で実施したアンケート調査から、災害時のボランティアに関して検討した。

行政関係者や親戚が救援活動に従事しても彼らがボランティアと捉えられることは少ないことが示された。つまり、業務として行われる支援、地域コミュニティ内の支援、親族内の支援といった従来より行われてきた支援よりも、地域コミュニティの外からやって来る、親族でもない人々の支援活動がよりボランティアとしての意味合いが強いことが示された。

それでは、災害NPOのスタッフや、被災地外より派遣された行政職員の活動はボランティアと呼べるのだろうか。ボランティアとは、「自発性」「社会性」「無償性」によって一般に定義される。この観点から言えば、有償である両者はボランティアとはいえない。しかし、最近ではこれに、「自己成長性」「継続性」を加え、「無償性」は「非営利性」と読み替えられることがある（岡本，2005）。つまり、活動により自己の成長を目指し、計画性を持って継続的な活動が行われるのであれば、有償であっても、ボランティアと呼ぶ方向に定義が書き換えられつつある。今後は、ボランティアがいかに社会に意味づけられているのかについて、地域や文化による違い、あるいは、時間経過に伴う変容に注目して検討していく必要があるだろう。

水害時のボランティア活動として多いのは泥の除去と災害ごみの除去であった。また、当然のことではあるが、自らが被災した人々は自らのことで手一杯でありボラン

ティア活動を行う余裕はない。水害は、震災と比べると、被害が局所的かつ短期的な場合が多いため、多数のマンパワーを要する泥の除去や災害ごみの除去に、被災地外部からのボランティアが当たることは有効な方法である。また、ボランティアの受入を被災地の住民が行っていたケースがあったが、こうした外部ボランティアに対する支援活動は行政等が行うべきであるとの考え方もできるであろう。さらに、大工仕事や被災度判定などの技能を有するボランティアは、ニーズとのマッチングを行うことによってより被災地の復興に貢献できるであろう。

被災地の人々はボランティアに対して好意的であり、ボランティアの活動が被災地の復興に大いに役立っていると考えていた。しかしながら、ボランティアの配置や作業の効率性についてさらに改善の余地が認められた。この点に関して、被災地の状況を的確に把握し、ボランティアを適切にマネジメントする災害ボランティアセンターの役割が期待される。

また、従来の防災活動を担ってきた消防団（水防団）や、災害ボランティアセンターの中心的な役割を担うと共に高齢者との関わりが深い社会福祉協議会への関心はそれほど高くなかった。こうした地域組織は自治会等とも連携しながら、活動の幅を広げていく必要があるのではないだろうか。

謝辞

アンケート調査にご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。また、新潟・福島豪雨、福井豪雨、台風23号の被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。

参考文献

- 1) 防災科学技術研究所「災害に強い社会システムに関する実証的研究」プロジェクトチーム（2005）：2004年水害に対する住民の防災意識と防災行動に関する調査 - 三条市・福井市・豊岡市におけるアンケート調査の概要 - ，防災科学技術研究所主要災害調査，No.40，93-102。
- 2) 茨城県社会福祉協議会（2004）：台風23号，新潟県中越地震に関する災害救援ボランティア情報（第4号）。
- 3) 新村 出（編著）（1998）：広辞苑第5版，岩波書店。
- 4) 岡本栄一（監修）（2005）：ボランティアのすすめ - 基礎から実践まで - ，ミネルヴァ書房。
- 5) 消防庁 HP 新潟福井豪雨災害におけるボランティアの活動状況（速報）：
<<http://www.fdma.go.jp/html/volunteer/naiyo.html>>
- 6) 内海成治・水野義之・入江幸男（編集）（1999）：ボランティア学を学ぶ人のために，世界思想社。
(原稿受理：2005年10月6日)

要 旨

本研究では、2004年に水害被害を受けた新潟県三条市、福井市、兵庫県豊岡市で実施したアンケート調査から、災害時のボランティアに関して検討した。具体的には以下の項目を検討した。誰がボランティアと呼ばれたのか。どのようなボランティア活動が行われたのか。ボランティアを、被災地の人々は、どのように評価したのか。平常時の地域活動の状況はどうであったか。結果として、ボランティアとは、被災者を助ける義務や役割を担っていないにもかかわらず、被災者を支援する人々に対して使われることがわかった。また、水害時のボランティア活動は泥の除去と災害ごみの除去が多数であった。さらに、被災地の人々はボランティアに対して好意的であり、ボランティアの活動が被災地の復興に大いに役立っていると考えていた。そして、住民の消防団（水防団）や社会福祉協議会への関心、活動への参加率はそれほど高くなかった。今後は、これらの結果を基にボランティアを視野に入れた防災体制を築く必要がある。

キーワード：災害ボランティア，新潟豪雨，福井豪雨，台風23号，アンケート調査